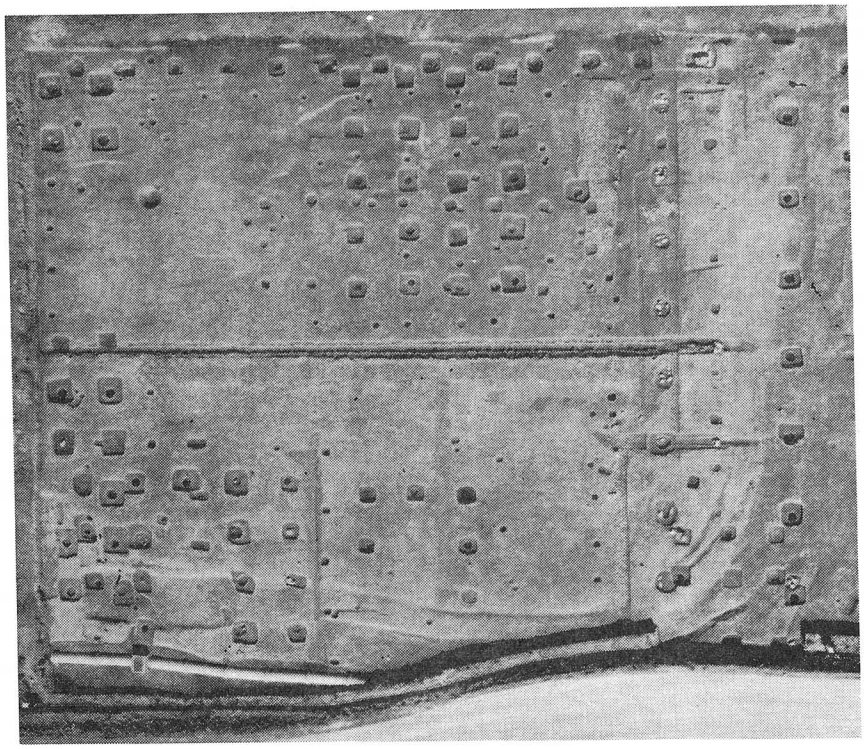
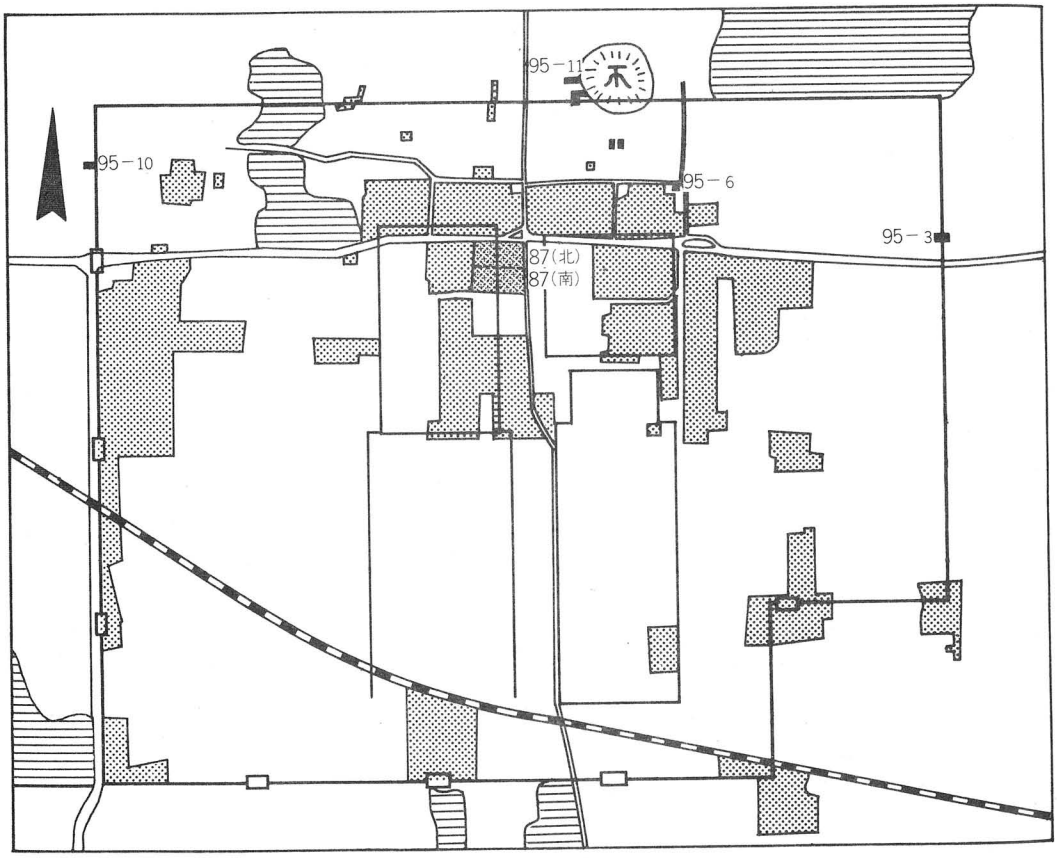
昭和50年度 平城宮跡発掘調査部

発掘調査概報



昭和51年5月

奈良国立文化財研究所



第１図　平城宮発掘調査位置図

表紙のカットは第87次(南)遺構空中写真

目　　次

Ⅰ　推定第１次内裏東半地区発掘調査……３頁

Ⅱ　宮跡内および周辺民家密集地域の
現状変更等にかかる調査……15

Ⅲ　薬師寺の発掘調査……17

Ⅳ　大安寺の発掘調査……19

Ⅴ　法華寺旧境内の発掘調査……21

Ⅵ　海竜王寺北方の発掘調査……22

Ⅶ　西大寺の発掘調査……23

昭和50年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部は、昭和５０年度の発掘調査を第１表のように実施した。以下に概要を報告する。

次数	調査地区	面積	調査期間	備考
87(北)	第一次内裏東半地区	3,400㎡	75年 7.2 ～10.2	
87(南)	〃	2,830	76年 1.6 ～ 3.25	
94	左京八条三坊十・十五坪(奈良市東九条町姫寺960)	2,500	75年 4.4 ～ 6.16	
95－1	法華寺旧境内 (奈良市法華寺町448－1)	180	4.7 ～ 4.19	中谷佐一氏所有地
2	海竜王寺北方、(〃 〃 903－1.3.4)	161	5.7 ～ 5.17	北良夫氏所有地
3	平城宮東面大垣(〃 〃 818－2)	23	7.17～ 7.19	川崎末雄氏宅
4	法華寺旧境内 (〃 〃 630－33)	26	7.21～ 7.24	川西唯夫氏宅
5	〃 (〃 法華寺東町419)	22	8.19～ 8.21	福山寛氏宅
6	第二次内裏北方(〃 佐紀東町2192)	12	8.25～ 8.26	田中友一氏宅
7	法華寺旧境内 (〃 法華寺北町937－1)	48	9.3 ～ 9.6	東口剛氏宅
8	〃 (〃 法華寺町)	24	9.8 ～ 9.13	奈良市(水道管敷設工事)
9	西大寺旧境内 (〃 西大寺芝町1—1—5)	33	10.27～10.30	西大寺境内
10	西一坊大路 (〃 佐紀町2610)	40	76年 1.20	藤原義高氏所有地
11	平城宮北面大垣(〃 〃 塚本2465)	58.5	1.27～ 1.30	加茂実氏宅
96	左京三条二坊六坪 (奈良市尼ケ辻町ゴドサ甲609-1)	4,200	75年 5.30～ 7.9 10.13～12.23	奈良郵便局移転予定地
	薬師寺食堂北方地域	250	75年 9.10～10.1	
	北門南方地域	27	9.25～ 9.29	
	八幡院	120	76年 3.25～ 4.2	
	大安寺北僧房	192	75年 12.6 ～12.23	大西光夫氏所有地
	東僧房東方	75	12.11～12.17	大西巡氏所有地

第1表　昭和50年度発掘調査一覧表

Ⅰ　推定第１次内裏東半地区発掘調査（第87次北・南）

平城宮跡第８７次調査は１９７５年７月２日から同年１０月２日までと、１９７６年１月６日から同年３月２５日までの両度にわたり、推定第1次内裏の東北部およびそれに東接する地域で実施した。調査面積はおよそ６２３０㎡（東西７８ｍ・南北８０ｍ）である。

１　調査地区

推定第１次内裏は平城宮の中央北寄りに位置し、その北半は宮内でも最も高台の好所を占める。今回の調査地区はその高台の東縁にあたり、北は通称一条通、東は歌姫街道に接する。当調査部の地区割に従えば６ＡＢＣ－Ｕ－６ＡＢＣ－Ｖ・６ＡＢＰ－Ａ・６ＡＢＰ－Ｂ地区である。調査区の西側は第６９次・７２次調査として、一条通を隔てた北側は第７次調査としてすでに発掘調査済である。

調査地の中央には南北に通る一段の段差がみられ、それを境にして西側一段高い部分が６ＡＢＰ地区、東側が６ＡＢＣ地区である。この段差は奈良時代の築地位置を踏襲した水田の畦畔であるが、築地の東半部は水田造成時に削りとられていた。

調査地区の土層は、上層を耕土・床土が一面に覆う。床土の下層は６ＡＢＣ地区と６ＡＢＰ地区で若干様相が異なる。６ＡＢＣ地区西半では床土のすぐ下に礫を多く含む地山がある。地山は東へ向かってゆるやかな傾斜をもち、東半では地山の下がりに応じて次第に厚みを増す黄褐色粘質土の整地層がみられた。また東半では地山の凹凸が激しく、部分的な整地が行われている。６ＡＢＰ地区南半では床土の下がすぐ赤褐色粘質土の地山となるが、北半には地山の上に敷きつめた灰褐色バラス混りの整地層が残存していた。この整地層は厚さ１０㎝前後で、南へゆくほど薄くなり、南半では全く認められなくなる。

２　遺　構

今回検出した遺構は堆積の擁壁・築地回廊・築地・建物・塀・門・溝・暗渠等で、このうち建物・塀・門はすべて掘立柱を用いたものである。その他に瓦・土

器などを含む多くの土壙がある。

A期の遺構

この時期に属する遺構には。積の擁壁１（ＳＸ６６００）、建物２棟（ＳＢ８３１５・８３３０）、門１（ＳＢ８３３３）、塀３条（ＳＡ３７７７・８２２９・８２３１）、溝３条（ＳＤ３７１５・３７９０・８３２７）、暗渠２（ＳＸ８３０７・８３１１）がある。溝ＳＤ８３２７と塀ＳＡ３７７７および建物ＳＢ８３３０には重複関係があり、Ａ期は少なくとも２時期に細分できる。

この時期には推定第１次内裏の東面は築地回廊あるいは塀で限られる。その西側は南面を高い塼積の擁壁ＳＸ６６００によって限られる敷地が造成され、東側の発掘区東端には北から南へ流れる平城宮の基幹排水路ＳＤ３７１５が掘られる。基幹排水路に沿った西岸にはＳＢ８３１５・ＳＢ８３３０が建つ。

塼積の擁壁ＳＸ６６００はすでに第６９次調査で検出されており、今回はその東延長部分を発掘した。南に向かってゆるやかに下がる地山の南方を切りとって造成した高い壇で、現状で1.7ｍ程の高さをもつ。壇前面の壁に塼を平積みにして化粧を施している。壇の前縁は当調査地西南隅において斜めに南方へ張り出し、発掘区の南端で再びわずかに北寄りに振れて東へ延びることが確認された。東方への延長は発掘区外となる。

今回の調査地区ではＳＸ６６００の壇上でＡ期に属する建物は検出されなかった。壇の下は一面にバラスを厚さ１２cm程に敷きつめている。

塀（ＳＡ３７７７）は発掘区中央を南北に通る。１６間分を検出した。柱掘形は一辺約1.2ｍの方形で、一辺約４０cmの正方形を呈する柱痕跡をもつものがあった。（この塀は第２７次・４１次調査で南方部分が検出されており、第２７次調査では角柱の柱根が出土している。）柱間は１5.5尺等間であるが、北から８番目の柱穴を欠き、そこでは柱間３１尺となる。またこの部分の東側に２０尺隔ててＳＡ３７７７と平行に塀ＳＡ８２３１がある。５間分が検出され、柱間は南の４間が１０尺等間、北１間が７尺である。ＳＡ３７７７の柱間３１尺のところは東面の出入口で、ＳＡ８２３１はその目隠塀と想定される。

東面を画する築地回廊は、その側柱の礎石跡が削平されていて検出できなかったが、発掘区中央南端において西側雨落溝ＳＤ３７９０を検出した。ＳＤ３７９０は底にバラスを敷きつめた溝で、発掘区南端から約１１ｍのところで南へ１段下がる。北方は１０ｍ程の間に底のバラス敷きの痕跡をのこすのみで、以北は削平されている。溝には廃絶時に投げ込まれたとみられる瓦片・凝灰岩片・バラスなどがつまっていた。ＳＤ３７９０が一段下がったところから暗渠ＳＸ８３１１によって築地回廊の基壇下を雨落溝と直角に東方へ抜けた溝ＳＤ８３２７がそのまま東へ流れ、基幹排水路ＳＤ３７１５に注ぐ。

ＳＸ８３１１は素掘りで、幅９０㎝の掘形をもつが、中央の幅３０㎝の部分に汚れた土がつまっていて、木樋などの施設のあった可能性が強い。溝ＳＤ８３２７は塀ＳＡ３７７７の柱位置を通過しているが、この部分は後世の溝によってすでに削平されており、塀との前後関係は不明であった。

これとは別に築地回廊にはＳＸ８３１１の北方約８ｍのところに盲暗渠ＳＸ８３０７が設けられている。ＳＸ８３０７は幅約８０㎝、深さ３０㎝で地山をＶ字状に切り込み、バラスをつめたものである。

東面築地回廊には発掘区中央で門ＳＢ８３３３がひらく。柱間１間・１０尺で、築地の一部を切りとった簡単な門であろう。北側の柱穴は浅く、Ｂ期の門ＳＢ８２３０の柱穴によって切られている。この門ＳＢ８３３３の東側に築地回廊と平行に塀ＳＡ８２２９がある。塀は５間で、柱間は８尺等間である。門ＳＢ８３３３に対応しており、目隠塀と考えられる。

溝ＳＤ３７１５は宮内の基幹排水路のひとつである。素掘りの大溝で、発掘区の東端部で検出した。幅３ｍ前後、深さ1.5ｍを測る。この溝は後のＢ期・Ｃ期においても改修されながら存続している。

ＳＤ３７１５の西岸にはＳＢ８３３０が建てられる。南北棟建物で、規模は桁行６間・梁間２間、柱間は桁行が１０尺等間、梁間が９尺等間である。棟通りには２間おきに間仕切の柱が立つ。この建物の東側柱は後のＳＤ３７１５改修の際に削られてしまったらしく、部分的にしか検出できていない。ＳＢ８３３０の内

部を溝ＳＤ８３２７が通過するために両者は共存し得ないが、柱穴と溝との重複関係はなく、両者の前後関係は不明である。ＳＢ８３３０はB期の建物ＳＢ８３２０と重複関係があり、ＳＢ８３２０よりも古い。建物ＳＢ８３１５はＳＢ８３３０の西北にある南北棟建物で南妻柱筋がＳＢ８３３０の北妻柱筋に揃う。B期の建物ＳＢ８３２０の廃絶時に掘られたと思われる土壙の下層で検出した。建物規模は桁行３間、梁間２間で、柱間は桁行、梁間とも５尺等間である。

期	遺構	柱間数	備考
A	SB8315	3×2	
	8330	6×2	間仕切
	8333	1	門
	SA3777	14以上	
	8229	5	目隠塀
	8231	4	〃
	SD3715		基幹排水路
	3790		築地回廊雨落溝
	8327		
	SX8307		盲暗渠
	8311		暗渠
B	SC5500	16以上	東面築地回廊
	6670	3以上	北面築地回廊
	SB8210	6×2	間仕切
	8215	〃	〃
	8230	1×2	門
	8240	5×2	
	8245	7×3	総柱
	8302	2以上×2	
	8320	7×2	間仕切
	SD3715		基幹排水路
	6618		雨落溝
	8211		〃
	8214		築地回廊雨落溝
	8216		〃
C	SB8218-A	5×2	
	8218-B	〃	
	8219	〃	
	8222	7×4	隅欠四面廂
	8224	6×4	三面隅欠廂
	8300	3以上×4	東西廂
	8305	7×2	
	8310	3×2	門
	8325	5×2	南北妻に廂
	SA3819		東面築地
	6624	12以上	
	6629	16	
	8217	11	
	SD3715		基幹排水路
	6607		
	6631		
	8226		築地雨落溝
	8227		
	8301		雨落溝
	SX8309		暗渠
D	SB8234	6×2	南妻に廂
	SA8238	28以上	
	SD8237		
	8239		

第２表　第87次（北・南）調査遺構時期別表

B期の遺構

B期の主な遺構には築地回廊2棟（ＳＣ５５００・６６７０）、門1棟（ＳＢ８２３０）、建物6棟（ＳＢ８２１０・８２１５・８２４０・８２４５・８３０２・８３２０）、溝5条（ＳＤ３７１５・６６１８・８２１１・８２１４・８２１６）がある。建物・門・塀はすべて掘立柱を用いたものである。またＢ期に属する建物はすべて南北棟で、柱間はどれも１０尺である。

この時期にはＡ期の塼積擁壁ＳＸ６６００は埋立てられ、壇の前縁は南方へ拡張される。推定第１次内裏の東面と北面をめぐる築地回廊ＳＣ５５００・ＳＣ６６７０が新たに建設されて、築地回廊で囲われた区画内の壇上には１０尺方眼の地割を基準とする整然とした建物配置がみられるようになる。東面の築地回廊の東側は幅１５ｍにわたって遺構がみられず、Ａ期から存続する基幹排水路ＳＤ３７１５の西側に沿って2棟の南北棟建物ＳＢ８２４０・ＳＢ８３２０が建てられる。

築地回廊ＳＣ６６７０は発掘区北端部で、南側柱と想定される4個の礎石抜取跡を検出したのみである。ＳＣ５５００は発掘区の中央を南北に通りＡ期の東面築地回廊の位置に一致する。西側は１６間分、東側はほとんど削平されていたが、発掘区南端で1間分の側程礎石根石列を検出した。このうち1個の礎石掘形が、Ａ期の塀ＳＡ３７７７の柱掘形を切り込んで掘られている。回廊側柱の柱間は13.3尺強の等間で、あるいは４０尺を3等分した可能性もある。梁間は2間で、柱間１２尺等間である。築地本体は削平されており、検出できなかった。

ＳＣ５５００には発掘区中央で門ＳＢ８２３０が設けられている。門の桁行は1間で柱間１５尺、梁間は、門の東半が削平されているが、2間で柱間１２尺等間と推定される。この門は築地回廊ＳＣ５５００と棟通りを揃え、推定第1次内裏の中軸線から東へ３００尺の位置にある。門ＳＢ８２３０はまた、北面築地回廊の推定心から南へ１５０尺の位置にある。築地回廊ＳＣ５５００・ＳＣ６６７０に囲まれた内側で、回廊雨落溝ＳＤ８２１６・ＳＤ８２１４を検出した。幅４０㎝、深さ１０㎝程の素掘りの溝で、2条の溝は回廊の東北入隅部において合流

し、東方へ流れ出る。ＳＤ８２１６は北方約２０ｍを検出したが、以南は削平されていた。

築地回廊で画された内部で４棟の建物を検出した。北方で東西に２棟並ぶＳＢ８２１０・ＳＢ８２１５は桁行６間・梁間２間の同規模・同形式をもつ。両建物の棟通りには北から２番目の柱筋にも柱が立っていた。両建物は第６９次調査で検出されているＳＢ６６６９の北側柱筋に北妻を揃える。ＳＢ８２１５は東面築地回廊ＳＣ５５００の心から５０尺の位置にあり、ＳＢ８２１０とは２０尺の間隔をあけて建つ。ＳＢ８２１５の南には３０尺の間隔をおいて建物ＳＢ８２４５がある。ＳＢ８２４５はＳＢ８２１５と東側柱筋を揃えている。桁行７間・梁間３間の総柱建物である。ＳＢ８２１０・ＳＢ８２１５・ＳＢ８２４５にはその北側と東側を通って、素掘りの雨落溝ＳＤ６６１８とＳＤ８２１１がＬ字型にめぐる。ＳＢ８２４５のさらに南方、４０尺の間隔をおいて建物ＳＢ８３０２がある。この建物はＳＢ８２４５と西側柱筋を揃えている。ＳＢ８３０２は南半を削平されてしまって、北端の桁行２間分しか検出できなかった。梁間は２間である。

その他築地回廊の区画内では北辺に近く、土壙ＳＫ８２１２・ＳＫ８２１３を検出した。いずれも深さ３０㎝前後で、少量の土器・瓦片が出土した。

東面築地回廊ＳＣ５５００の東方、発掘区東端に、基幹排水路ＳＤ３７１５があり、この溝の西岸に沿って南北に建物ＳＢ８２４０とＳＢ８３２０が建てられている。北側がＳＢ８２４０で、後述のＣ期の溝ＳＤ８２２７の下層で検出した。桁行５間・梁間２間である。柱掘形は一辺１.２ｍ前後の方形で、建物外方へ向かって柱を抜いた跡がある。南側はＳＢ８３２０で、桁行７間・梁間２間である。棟通りの北から４番目の柱筋に柱穴があり、建物を北３間と南４間に間仕切っている。この建物の西側柱の位置にあたって点々と土壙があり、柱抜取後の柱穴のくぼみをゴミ捨場として利用したものらしい。少量の土器と比較的多量の瓦片が出土した。

Ｃ期の遺構

Ｃ期に属する遺構は建物８棟（ＳＢ８２１８－Ａ・８２１８－Ｂ・８２１９・

８２２２・８２２４・８３００・８３０５・８３２５）、門１棟（ＳＢ８３１０）塀３条（ＳＡ６６２４・６６２９・８２１７）、築地１条（ＳＡ３８１９）、溝６条（ＳＤ３７１５・６６０７・６６３１・８２２６・８２２７・８３０１）、暗渠２である。建物・門・塀はすべて掘立柱を用いていた。Ｃ期には塀で仕切られた区画内の建物の建替えによってC_1・C_2の二時期がある。

この時期にはＢ期の築地回廊は築地に改修される。築地に囲まれた内部の東北部には塀ＳＡ６６２９・ＳＡ６６２４によって囲い込まれた区画が形成され、それを塀ＳＡ８２１７で南北２つの区画に仕切って、各々に１棟ずつの建物を配する。区画の南側にも建物が配される。

築地で囲まれた内部の排水は２本の溝で東方の基幹排水路ＳＤ３７１５に流れ込む。築地の外側、東方の排水路までの間は顕著な遺構が少なく、基幹排水路に近くやや小規模な建物ＳＢ８３２５がみられる。

築地ＳＡ３８１９は東面を画する施設で、その中心線はＢ期の東面築地回廊ＳＣ５５００と一致する。築地本体は東半部がすでに削平されており、西半部で厚さ２０㎝前後の、流れ出した築地積土の堆積を認めた。築地心から西へ１０尺のところには、これと併行する幅３０㎝、深さ１０㎝程の素掘りの雨落溝ＳＤ８２２６がある。またＳＡ３８１９には、調査地区の南端で門ＳＢ８３１０がひらく。ＳＢ８３１０は南半が調査区外になり未発掘であるが、柱間寸法からみて、桁行３間・梁間２間の八脚門と推定される。柱間寸法は桁行北端間が８尺、北から２間目が１３尺で、ここを中央間と推定した。梁間は９尺等間である。なお北辺を限る築地は一条通の下に想定されるが、今回の調査では確認していない。

築地に囲まれた内側の東北隅は塀ＳＡ６６２４・ＳＡ６６２９・ＳＡ８２１７によって仕切られる。塀柱間はすべて１０尺等間である。ＳＡ６６２９は南北方向の塀で、おそらく北端では北面築地にとりつくと思われ、１６間南へのびて東西方向の塀ＳＡ６６２４にとりつく。ＳＡ６６２４の西側は調査区外にのび、東側はＳＡ６６２９との交点から１１間のびて、東面築地ＳＡ３８１９にとりつく。この築地と塀で囲まれた区画はさらに東西方向の塀ＳＡ８２１７によって南北二

つの区画に等分される。ＳＡ８２１９は１１間で、西端は塀ＳＡ６６２９に、東端は東面築地ＳＡ３８１９にそれぞれとりつく。ＳＡ６６２４が築地にとりつくところでは、東端の柱と築地との間に凝灰石や河原石を敷き並べているのがみられた。

南北の各区画には１棟ずつの建物が配される。C_1期には南の区画にＳＢ８２１９、北の区画にＳＢ８２１８－Ａが建てられる。ＳＢ８２１９は桁行５間・梁間２間の東西棟建物で、柱間は桁行・梁間とも１０尺等間。ＳＢ８２１８－Ａは桁行５間・梁間２間の東西棟建物で、柱間寸法は桁行9.5尺等間、梁間１０尺等間である。ＳＢ８２１８－Ａは、その後南へ８尺程ずらして、全く同規模の建物ＳＢ８２１８－Ｂに建て替えられる。ＳＢ８２１９・ＳＢ８２１８－Ａは東面築地から約５０尺の間隔をおき、東側の妻柱筋をそろえて建てられる。またＳＢ８２１９は区画の南北中央に位置し、建物の柱筋を塀ＳＡ６６２９の柱位置に一致させている。建て替えられた建物ＳＡ８２１８－ＢもやはりＳＡ８２１９と東妻を揃える。このとき柱筋を塀ＳＡ６６２９の柱位置に一致させるようにする。

C_2期になるとこの区画内の建物はＳＢ８２１９がＳＢ８２２４に、ＳＢ８２１８－ＢがＳＢ８２２２にそれぞれ建替えられる。ＳＢ８２２４は桁行５間・１０尺等間、梁間２間・10尺等間の身舎四面に、１２尺の幅で隅欠の廂をもった東西棟建物で、身舎には間仕切がある。身舎の柱筋を周囲を画する塀ＳＡ６６２４・ＳＡ６６２９・ＳＡ８２１７の柱位置に揃えている。なおこの建物の身舎東妻の柱下には、根腐れ補修のためか、後に礎石が差し込まれている。

ＳＢ８２２２は桁行５間・梁間２間の身舎の南・北・西３面に１２尺幅の隅欠廂をもつ。身舎の柱間寸法は前身建物の柱間を踏襲しており、桁行9.5尺等間、梁間１０尺等間である。ＳＢ８２２２はＳＢ８２２４と西の妻柱筋を揃える。この時期にＳＡ６６２９から１０尺隔てた東側に平行に、柱間２間の短かい塀が設けられる。これは目隠塀と考えられ、ＳＡ６６２９の柱間のうちＳＡ６６２４から北へ６間目とＳＡ８２１７から北へ６間目にそれぞれ対応するので、この柱間が両区画の出入口と想定される。

塀で囲まれた区画の南には他に2棟の建物、ＳＢ８３００とＳＢ８３０５がある。ＳＢ８３００は調査地区の西南隅で検出した。南北棟建物で東西に廂をもつ。南半が未発掘であるが、北半の桁行３間分を検出した。梁間は４間で、柱間は桁行、梁間ともに１０尺等間である。建物の東側に沿って北方の溝ＳＤ６６０７から南へ流れ出す浅い溝ＳＤ８３０１があり、これが建物の東側のところで急に深くなる。ＳＤ８３０１はＳＢ８３００の雨落溝を兼ねたものであろう。建物ＳＢ８３０５はＳＡ６６２４の南側にある東西棟で、桁行７間・梁間２間、柱間は桁行が9.5尺等間、梁間が８尺等間である。

築地に囲まれた区画内の排水は、東西に流れる二条の排水溝ＳＤ６６０７とＳＤ６６３１によって処理される。ＳＤ６６３１は塀ＳＡ８２１７の北側２ｍのところを塀に沿って東流し、築地ＳＡ３８１９の雨落溝ＳＤ８２２６に合流して約１０ｍ南へ流れ、そこで再び東折して築地の下を暗渠によって東側へ抜ける溝ＳＤ８２２７となり、基幹排水路ＳＤ３７１５に注ぐ。暗渠は凝灰岩切石を組んだもので、底石と側石の一部が残存していた。溝ＳＤ８２２７の築地東方約１５ｍの間はすでに削平されていて検出できなかった。もう１条の溝ＳＤ６６０７は塀ＳＡ６６２４の南約１６ｍのところを東流する。築地の西側では幅１ｍ、深さ１０㎝程で、中央の幅４０㎝の部分がそれより２０㎝程掘りくぼめられており、両側と中央の掘りくぼめられたところに玉石の抜取痕跡がある。築地部分では暗渠ＳＸ８３０９でその下を抜け、そのまま東流して東方の基幹排水路ＳＤ３７１５に流れ込む。ＳＸ８３０９には玉石の抜取痕跡はみられず、バラス・瓦片・土器片を混じた汚れた土がつまっていた。この部分に人頭大の河原石３個があるが、後から投げ込まれたものである。ＳＤ６６０７の築地東側１０ｍの間はすでに削平されていて検出できなかった。またその東方もわずかに溝底をとどめるのみで、玉石で組まれていたかどうかは不明である。

溝ＳＤ６６０７とＳＤ３７１５の合流点に近く、建物ＳＢ８３２５が建てられる。ＳＢ８３２５は南北棟建物で、桁行３間・７尺等間、梁間２間・７尺等間の身舎南北の妻側に幅１０尺の廂を付した建物である。

D期の遺構

この時期に属する遺構には、建物1棟（ＳＢ８２３４）、塀1条（ＳＡ８２３８）、溝2条（ＳＤ８２３７・８２３９）がある。溝ＳＤ８２３７、ＳＤ８２３９と塀ＳＡ８２３８はその位置関係から一連の遺構と考えられる。

溝ＳＤ８２３７とＳＤ８２３９は調査地区の東半を南北に平行して流れる。ＳＤ８２３７は幅１ｍ前後、深さ約３０㎝、ＳＤ８２３９は幅６０㎝前後、深さ約１５㎝、両溝の心々距離は約4.5ｍである。溝は素掘りで、この地区を東西に流れる溝ＳＤ６６０７・ＳＤ８２２７・ＳＤ８３２７のどれよりも新しい。溝ＳＤ８２３９は浅いために、北部では削平されて、検出できなかった。この２条の溝ＳＤ８２３７とＳＤ８２３９にはさまれた部分の中央に、塀ＳＡ８２３８がつくられる。柱間は９尺等間である。塀には発掘区南端で門がひらく。門の柱間は南側の柱穴の一部しか検出していないので確定できないが、およそ１８尺程になる。

溝と塀とによって画された東側、発掘区の中央に、南北棟建物ＳＢ８２３４が建てられている。桁行６間・８尺等間、梁間２間・７尺等間の建物で、南から２列目の棟通りにも柱が立つ。塀ＳＡ８２３８との距離は約２０尺である。

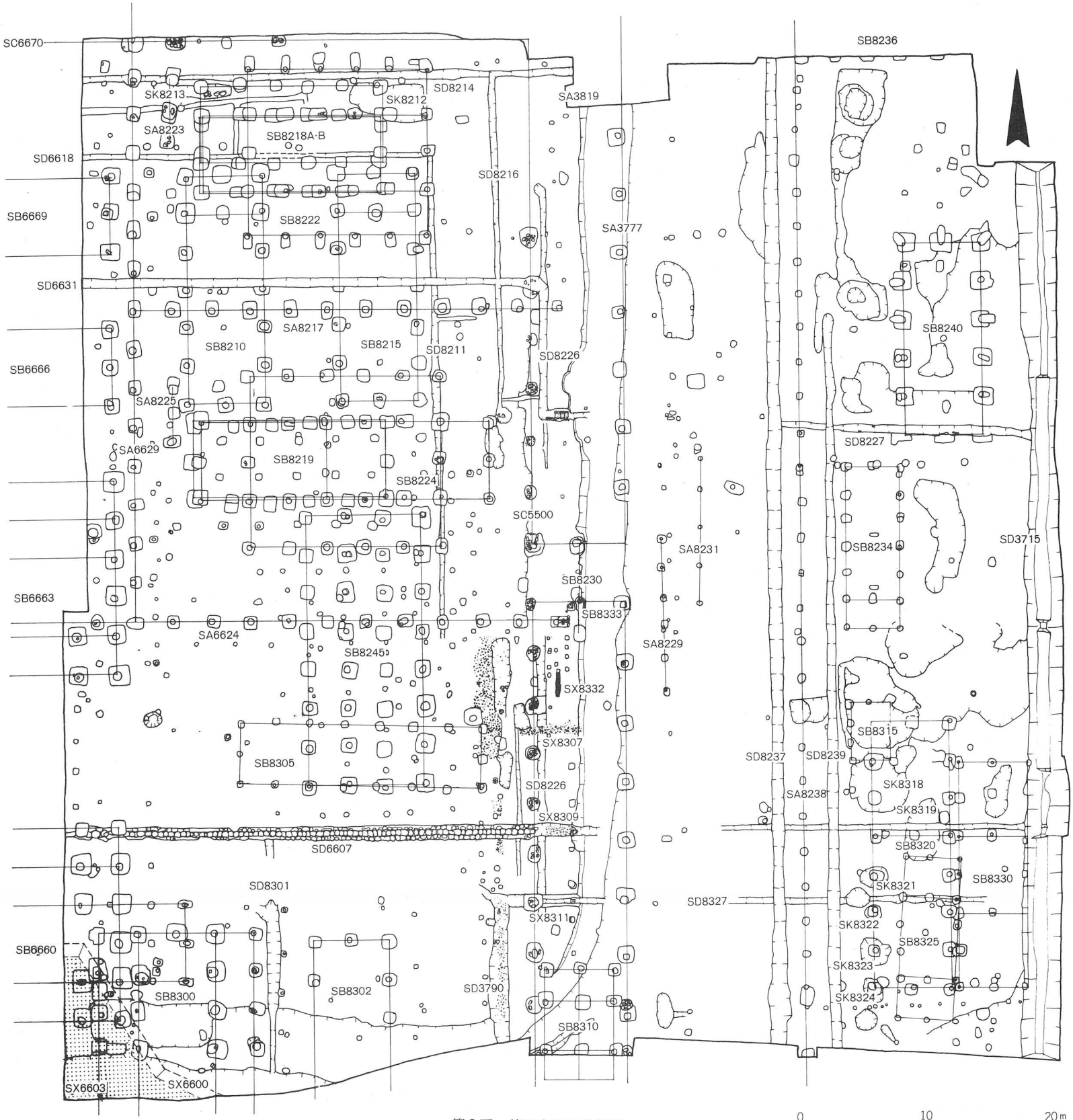
その他の遺構

発掘区西半（６ＡＢＰ地区）ではＣ期の建物ＳＢ８２２４・ＳＢ８２２９と重複して、ＳＢ８２２８がある。柱穴の切合いからＢ期よりは新しい。桁行５間、梁間２間の建物とも考えられるが、Ｃ期の建物の足場穴の可能性も残る。

築地回廊ＳＣ５５００の基壇上、門ＳＢ８２３０の南約６ｍのところで、平瓦を南北１列に敷いた上に丸瓦を伏せた遺構ＳＸ８３３２を検出した。平瓦は７枚、丸瓦は６個残っている。性格は不明である。

発掘区東半（６ＡＢＣ地区）北端では、壁際で５個の柱穴ＳＢ８２３６を検出した。第７次調査との関係で大規模な南北棟建物は考えにくい。東西棟の建物かあるいは塀であろう。整地層から掘り込まれており、また遺構の重複状況から、Ｃ期の可能性が強い。

６ＡＢＣ地区の東半、基幹排水路ＳＤ３７１５に沿った西側には、多数の土壙



第２図　第87次調査遺構図

が掘り込まれていた。

3　遺　物

今回の発掘により出土した遺物は瓦・塼・土器・金属器がある。遺物については現在整理中であり、とくに調査中に気のついた範囲の記述にとどめる。

瓦は型式の判明したものでは、当調査部の編年でいう第Ⅲ期（天平１８年〜天平宝字初頭）にあたる奈良時代中頃の瓦が比較的多い。

塼のほとんどはＡ期の塼積の擁壁ＳＸ６６００の前面から出土した。この中に方形の塼が混ざっていたことは注目される。この塼は塼積擁壁の上縁に用いられたものか、あるいは壇の上面の舗装に使用していた可能性もある。

土器は土師器・須恵器の他、灰釉・緑釉陶器がみられ、三彩を施した鉄鉢の破片も出土した。その他土馬３点が出土している。全般的に見ると奈良時代の末頃と考えられる土器が多い。塼積擁壁ＳＸ６６００埋立て時の整地土中からは、ＳＫ２１９の遺物と同時期とみられる土師器、杯Ａの破片が出土している。

金属器では刀子・飾鋲・鉄釘・銅釘・鉄針と万年通宝１点が出土している。

4　まとめ

今回の調査によって推定第１次内裏の東北隅部分と、それに東接する地区の様相が明らかにされた。

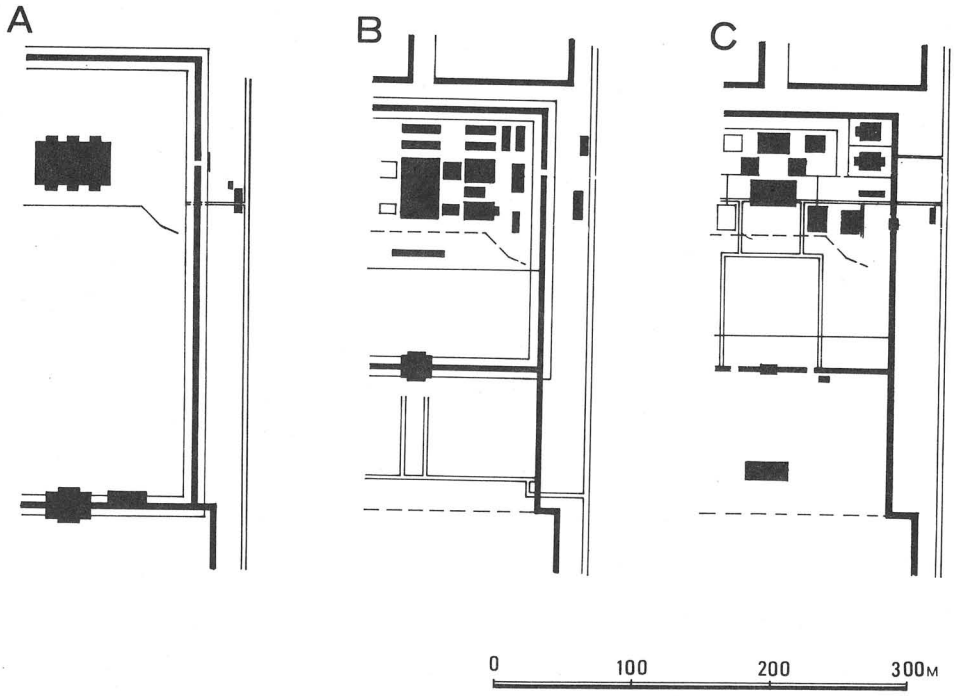
推定第１次内裏の郭内において、第６９次・７２次調査の結果、Ａ期には壇上の中心部に建つ基壇建物の存在が報告されている。今回の調査地区内ではＡ期の建物の存在は認められなかった。Ｂ期の建物は今回の調査で７棟を検出した。その建物配置は、１０尺方眼の基準地割をもつ整然とした配置であり、１０尺等間の建物が第６９次・７２次の調査で検出した中心部の建物と柱筋を合わせて配置されている。Ｃ期には前回の調査でも築地で囲まれた郭内中心部分の正殿の背後に、塀によって囲い込まれた一画を検出したが、今回調査した郭内の東北部分においても築地の東北入隅部を塀によって囲い込み、南北に並ぶ２つの区画をつくって、その各々に１棟ずつの建物を配する状況がみいだされた。このような配置は、古図にみる平安宮内裏東北隅部分の昭陽舎・淑景舎の配置に類似しており、

今後この時期における推定第１次内裏地域の性格を知る上に大きな手がかりとなろう。

各時期の年代は、Ａ期が奈良時代前半、Ｂ期は奈良時代後半、Ｃ期は奈良時代末以降にあてられる。

今回検出した東面築地回廊ＳＣ５５００の桁行柱間は１３.３尺強を計り、第２７次・４１次調査の結果とは異なる値を得た。今回の調査の所見から、当調査地区に現存する根石列によって復原される築地回廊をＢ期の造営に比定したが、築地回廊についてはまだ多くの問題を残しており、今後の成果や他地区との比較により検討してゆかなければならない。

また、第６９次調査で検出したＡ期の壇上の南縁にあたる博積擁壁ＳＸ６６００は東に直進せず、今回の調査地の西端で斜め南方にまがることが判明した。これによって、Ａ期の壇上敷地は、東西に袖をもつ空間であることが想定できる。この擁壁と東面を画する築地回廊ＳＣ５５００、あるいは塀ＳＡ３７７７とのおさまりについては今後の調査にまたねばならない。



第３図　推定第１次内裏遺構変遷図

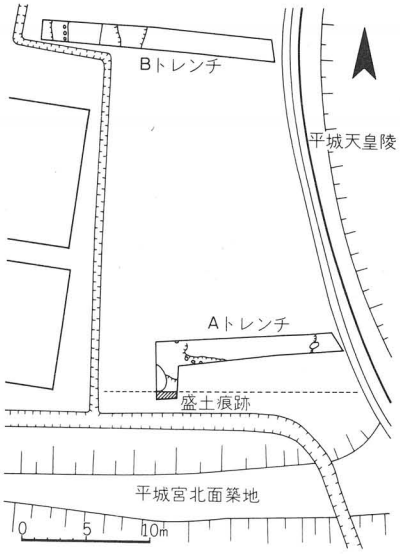
Ⅱ　宮跡内および周辺民家密集地域の現状変更届等にかかる調査（第95－3・6・10・11次）

民家密集地における現状変更届等による発掘調査で、いずれも小範囲の発掘にとどまるが、その内北面大垣、西一坊大路にかかるものがあり、その概略を記す。

北面大垣（11次）　調査地は、平城宮北面築地が土塁として極めて良好にのこる史跡地に北接しており、また平城天皇陵の前身である市庭古墳の後円部にあたる。

調査は、畠地の南辺と北寄りにA・B２本のトレンチを設定して行い、その面積は５８.５㎡である。Aトレンチでは、市庭古墳の墳丘にかかわる痕跡はすでに削平されて遺存せず、地山上に厚さ１０㎝内外の粗雑なバラス敷が覆って、奈良時代の瓦・土器片を比較的多く含んでいた。トレンチの西端で南に掘りひろげた部分では、東西にのびる厚さ約２０㎝の黄色粘土からなる精良な盛土を検出した。発掘では８０㎝程度の幅しか検出しなかったが、さらに南にのびている。

Bトレンチでは、西方に向って下降する地山の地形を検出した。わずかではあるが斜面と平坦面をなす部分があり、古墳の原形は削平されているが墳丘の旧状を知りうる手掛りをえた。すなわち、トレンチの両端で下降する部分は後円部最下段の裾部にあたる。幅2.５ｍの平坦面をなす部分は古墳の第１段平坦面の痕跡であり、３個の小穴が南北にならんで存在し、円筒埴輪の据付痕跡と思われた。その東の斜面は第２段目の裾部と考えられたが、それより東方は削平が著しい。市庭古墳は後円部直径約１５０ｍをはかり３段築造とみられるが、破壊は徹底して葺石や埴輪はまったく存在せず整地層からは奈良時代の



第４図　第95－11次発掘遺構図

土器の細片を発見したにすぎない。

Aトレンチで検出した黄色粘土の盛土は、平城宮北面大垣ないしはその壕地（犬走り）に関する遺構であり、バラス敷は京極大路に関するものとみられる。

今回の調査によって、指定地内に存在する土塁状遺構が北面大垣そのものである確信をえた。現状では北面大垣の遺構としてはこの地域をおいてほかになく、十分な保存がのぞまれる。

西一坊大路（10次）　調査地は南北に長い水田であり、その南と北に東西方向のトレンチを設定した。両トレンチで検出した遺構はほゞ同じで、トレンチの西部幅約4mの部分は、水田下の床土を除去すると暗褐色砂質土の地山があらわれ、平城京西一坊大路路面敷と考えられた。東部の幅約1.4m、深さ約40cmの溝で、灰色粘質土、青灰色砂質土が堆積しており、下層の砂質土から少量の土器片が発見された。この溝は西一坊大路東側溝にあたる。ただ調査地内では幅員の全体を検出しておらず、東岸はさらに東にのびると考えられる。

今回の発掘所見と、さきに近接地での調査（第82－4次）で西側溝を検出しており、その結果、大路の幅員が約24m（80尺）であることが判明した。

なお3次は一条通りより北側、東面大垣のすぐ内部に位置する民家の改築にともなうトレンチ調査で、南北に走る溝2条を検出したが、直接大垣に附属するものではなく、その内側で平行して造られた排水用施設と考えられた。

また6次は第2次内裏北方の外郭官衙地区の北東部にあたり、農小屋を車庫に改築する事前調査として約12㎡を発掘した。この地は従来の調査から市庭古墳の周濠を埋立て、官衙を造営したことが確認されている。今回もこの埋立てによる整地土を現わし、さらに東西に走る築地南縁部を検出した。この築地の本体は発掘区に北接する現道路にあり、外郭官衙の北辺を限る築地塀と思われる。但しその築地に伴う側溝などは今回の調査では発見されなかった。なお築地の南に南北2.6m以上、東西1.8m以上、深さ25cmの土壙が存在し、土器・瓦片と共に軒瓦3点の出土をみた。

Ⅲ　薬師寺の発掘調査

今回の調査は薬師寺伽藍の環境整備にともなう事前調査である。調査は食堂北方、北門西南方、および八幡院（六条大路側溝）地区である。なお、北門西南方地域は調査面積が小さくまた後世の破壊が著しく斜行溝を検出したにとどまり、記述を略す。

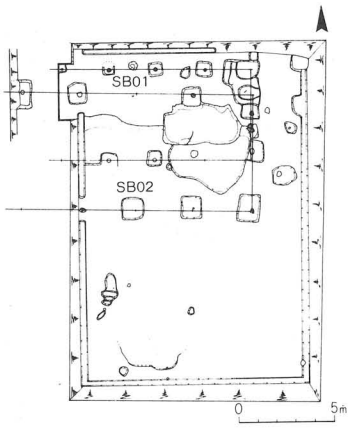
食堂北方地域　調査地は、北口参道をへだてた東側で、発掘された食堂基壇北辺から約３０ｍ北方の地点に当る。金堂西側にあった唐院の移転予定地で、昭和４０年仮金堂建設にともない一部発掘が行われた所である。

土層の層位は、上層から、近年の盛土である茶褐色土層（厚さ３０cm）、耕土である黒色腐植土層（２０cm）、赤褐色粘質土層（３０cm）、暗灰色粘質土層（１０cm）、茶灰色粘質土層である。発掘区西北部の一部では、赤褐色粘質土層と暗灰色粘質土層の間に黄褐色粘質土層（２０cm）が入り、また東南部では、赤褐色粘質土層と茶灰色粘質土層の間に四層に分かれる砂層がある。赤褐色粘質土層は若干の遺物を含み、ある時期の整地層で、暗灰色粘質土層以下が地山である。

遺構：発見遺構は、赤褐色粘質土面で大小６個の土壙、暗灰色粘質土面で、奈良時代と考えられる東西棟掘立柱建物２棟および土壙１などを発見した。赤褐色土面で検出した土壙は、全て不整形で発掘区全体に散在している。埋土、遺物から二群に分けられる。一群は、発掘区北寄りに東西に並ぶ２個の土壙で、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、瓦器を包含した鎌倉時代の土壙であり、もう一群は南部にある３個の土壙で、大量の瓦、平安時代の緑釉・灰釉を出土し、平安時代の瓦廃棄のための土壙と考えられる。もう１個の土壙は北端東寄りにあり、昭和４０年の調査で大部分を掘っている。

暗灰色粘質土面の掘立柱建物２棟は、発掘区北部に重複して検出した。２棟とも２間×４間以上の東西棟建物と考えられ、北寄りのＳＢ０１は柱間寸法8.5尺（2.5ｍ　復原尺0.２９５ｍ）、南寄りのＳＢ０２は１０尺（3.0ｍ　0.２９７ｍ）である。東妻をそろえ、柱穴の切合い関係からＳＢ０１がＳＢ０２より古い。

遺構面の削平や新しい土壙による破壊などのため、確認できなかった柱穴もあり（ＳＢ０１では北側柱の東から第一番目、南側柱の第一、二番目、ＳＢ０２では北側柱の第三番目の柱穴が未確認）、ＳＢ０２は身舎梁間２間、東西両廂付き南北棟建物（４間×３間以上）になる可能性もある。柱掘形は、ＳＢ０１が一辺７０㎝前後の四辺形、ＳＢ０２が一辺１ｍ前後の四辺形で、埋土は両者とも赤褐色粘質土である。ＳＢ０１で７個の柱根が、ＳＢ０２で６個が遺存していた。また柱穴の立ち割りによれば、ＳＢ０２の柱穴では柱の沈下防止のため掘形の底に平瓦片を入れこんでいた。柱掘形の深さは、ＳＢ０１が１５～２０㎝、ＳＢ０２が４０㎝前後であり遺構面の削平が著しいことを示している。発掘区西北部で、暗灰色粘質土の上に、ＳＢ０１の柱掘形がほりこまれた黄褐色粘質土があるが、これは削平された整地層の残ったものであろう。ちなみに、本発掘区遺構面を附近の調査で確認した遺構面の標高と比較すると本発掘区の遺構面が標高５９.９～６０.０ｍ、本発掘区西北方の昭和４０年９月高天商店の調査、西南方の昭和４９年１０月西僧房食堂調査の食堂西北角の両者の遺構面が６０.３ｍである。後二者は、旧地表をほぼ残していると考えられ、本発掘区遺構面とは０.３～０.４ｍの差がある。このほか発掘区東北隅付近に柱穴２、南端中央付近に柱根２、ＳＢ０２内に土壙１を検出したが、柱穴・柱根は本発掘区内では建物にまとまらなかった。



第５図　食堂北方遺構配置図

遺物：遺物は、大部分赤褐色粘質土面の土壙から出土し、暗灰色粘質土面では遺構面の削平のためほとんど出土していない。瓦は、平箱約２０箱におよび、南部の３個の土壙から特に多く出土している。軒瓦の大部分は、本薬師寺式複弁蓮華文軒丸瓦、同式偏行唐草文軒平瓦で、ほかに片岡王寺式細弁蓮華文軒丸瓦、本薬師寺式重弁蓮華文軒丸瓦、橘寺式複弁蓮華文軒丸瓦各１点、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、鎌倉時代の連珠文軒平瓦などが数点出土している。

土器は平箱約３０箱分出土している。南部の３個の土壙からは主に奈良末～平安初の土師器・須恵器、ほかに平安初期の緑釉花文線刻皿、平安中期の灰釉壷各１点が、北寄りの２個の土壙からは瓦器が出土している。このほか、南部の西側の土壙から、奈良時代の緑釉の建物模型の勾欄部分の断片、およびガラス片各１点が出土している。

２棟の東西棟建物の時期・性格については資料が乏しく確定できないが、一応次のように考えておきたい。時期は、建物の規模、掘立柱建物柱掘形出土の奈良時代前期の須恵器などから、両者とも奈良時代と考える。性格については、両者が東妻を揃えていてＳＢ０２がＳＢ０１の建て替えと考えられること、食堂・十字廊（食殿）の後方に位置することから、両者とも大炊屋などに関係する建物と考える。

八幡院地区　調査地は八幡神社北側であり平城京六条大路南側溝と右京七条二坊一坪内の２ケ所の土壙を検出した。溝幅は約4.0ｍ深さ約1.7ｍである。南岸には径１０cmほどの丸太を３０cm間隔に打ちこんだ護岸施設がみられた。溝内堆積土から奈良時代の須恵器、土師器、瓦が少量出土した。溝から薬師寺南面築地までの心々距離は約３4.0ｍである。

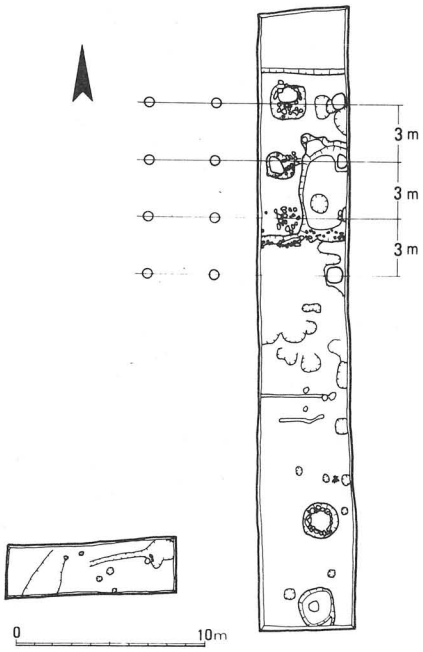
Ⅳ　大安寺の発掘調査

大安寺旧境内において家屋新築等にともなう事前調査を２件行なった。

北僧房　調査地は従来の大安寺旧境内発掘調査結果からみて講堂を囲む三面僧房の東北隅で、北僧房の東端附近と推定される。調査は３３ｍ×５ｍの南北トレンチ、９ｍ×３ｍの東西トレンチを設定し、約１９２㎡について行なった。調査の結果、発掘区北側で中房の一部を検出したが、南半分は中世以降の土壙や撹乱によってすでに削平され、大房を検出することができなかった。鎌倉時代初頭と考えられる井戸１基を検出したに留まった。

遺構：中房・北面中房の梁行通りの礎石および根石列を２列検出した。１列に４つの礎石があり、大梁をかける位置にも柱をもつ梁行３間の総柱建物である。

梁行の柱間寸法は１０尺等間であり、『資財帳』の中房の記載や昭和４１年度西面僧房調査の中房の柱間寸法と一致する。桁行の柱間寸法については、礎石が動いているため、正確な数値は求められないが１０尺以上であろう。礎石は西列で２個、東列で４個の計６個を検出したが、いずれも原位置を移動している。東列礎石は、高低があり根石等の据付け痕跡が認められないことから、いずれも原位置から西に動いていると考えられる。西列礎石も若干移動しているものの、削平された南の柱位置をのぞいて、人頭大の根石をもった据付け痕跡が検出されている。礎石は東列南の逆截頭方錐形の凝灰石製礎石のほかは自然石を用いている。なお、梁行北側柱心から約1.6ｍ北で遺構面に落差（２０㎝）があり、基壇状になっている。



第６図　北僧房遺構配置図

井戸：発掘区南半で検出した。柱を転用したとみられる円形の井筒を用い、その上方は軒瓦・丸平瓦・塼・凝灰岩切石を積み重ね化粧している。井筒は、長さ約1.6ｍ、径0.8ｍあり、半截してからくりぬいたもので、下端には地下水を入れるための仕口が設けてある。出土した瓦器によって鎌倉時代初頭のものと考えられる。

遺物：遺物は遺構面を覆う暗灰色粘質土から多量に出土した。その多くは瓦類で、土器は少ない。瓦類は、軒瓦・丸平瓦のほか鬼瓦・塼などが出土している。大半は、奈良時代のものであるが、若干、平安・鎌倉時代のものも混じる。１２５点出土した軒瓦のうち、いわゆる大安寺式とよばれる単弁１６弁蓮華文軒丸瓦（６１３８）と、羊歯状に連なる３回反転均整唐草文軒平瓦（６７１２）の組み合せが半数近くを占めている。

土器類は量的に少なく、いずれも小片である。土師器（皿・杯・甕・燈明皿）須恵器（杯・蓋・鉄鉢・壷・甕・浄瓶）のほか、瓦器・施釉陶器などが出土した。時期は、奈良時代中葉から鎌倉時代にかけてのものが混在する。施釉陶器には、灰釉円面硯・二彩皿・緑釉椀・皿・壷・青磁椀などがある。

他に埴輪が出土しているが、大安寺寺域内の杉山古墳のものである。

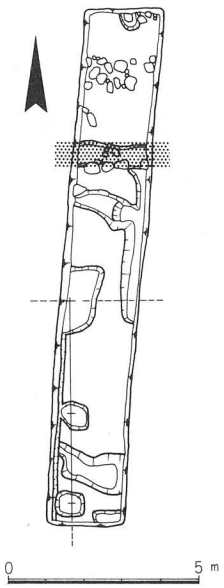
東僧房東方　調査地は、大安寺旧境内東面僧房の東側にあたる。

検出した遺構は、東西棟建物２棟、南北溝１条、土壙等である。検出面は地表下３０～４０㎝の灰褐バラス層（地山）である。東西棟建物は２棟とも西妻柱のみの検出であったが、柱通りを揃えて配置している。南北溝は幅４ｍ、深さ0.6ｍと大規模なものであり、東面僧房の外側を区画する位置にあたる。なお、凝灰岩製の切石（３５×８０㎝）が据付けられた状態で出土したが、その性格は不明である。

Ⅴ　法華寺旧境内の発掘調査（第95－１・４・５・７・８次）

法華寺旧境内における発掘調査を５件実施した。いずれも家屋改築にともなう事前調査であり、発掘面積も限られている。しかも後世の撹乱が著しく、顕著な遺構はわずかであった。９５－４次は法華寺旧境内南半中軸線に近く、位置的に南門が想定できる場所での調査で、建物１棟、東西溝１条を検出した。

建物遺構は南北に並ぶ小穴列であり、柱間2.4ｍ、２間分である。この小穴列の北3.0ｍの位置には、４０×５０㎝の天端の平らな石があり、これを同一建物の礎石と想定することもできる。もしそうであれば、前述した３つの小穴はいずれも礎石の抜取り痕跡であり、南北３間以上の礎石建物が復原できよう。建物については、発掘区が狭長なため、東西方向の規模は不明である。東西溝は幅５０㎝前後、深さ１０㎝が残存していた。溝の南側には面を揃えた川原石が並ぶが、北側ではその痕跡が明瞭でない。あるいは溝の南側に存在す



第７図　第95－４次遺構図

る建物と関連して、溝の片側にのみ基壇縁をかねた石が配された可能性もある。溝の北側は、黒茶褐色砂質土が堆積し、その中に礫が多く捨て込まれた状況がみられたが、時期的には溝よりも後のものである。

今回検出した建物は、発掘区の制約などから極めて一部しか調査できず、その性格を明らかにすることができなかった。

９５－８次は、既設水道管取り替えにともなう掘削の立会であるが、当該地は現法華寺南門前の道路であり、近世の絵図では南門両脇の築地塀に添って巨大な礎石が数個配列されていて、従来から金堂もしくは講堂がこの附近に当ると推定されてきた。そのため水道管取り替えに当っては特に南門前附近だけは機械を排して手掘りにすることを求めて立会した。掘削は以前の水道管敷設時の掘形を再度掘り直したため、生ぶな土は切れ切れに断面にしか現われない結果となったが、東西に１０尺間隔で並ぶ５間分の掘立柱跡を検出した。これは中軸線で折返すと７間の建物になると推定され、法華寺講堂もしくはその前身の藤原不比等邸内の主要建築に当ると思われる。法華寺現本堂の地下でも当初の掘立柱建物を礎石建てに改作した事実があり、食堂跡と推定されている。南門附近の今後の調査が望まれる。

なお１次、５次、７次（立会）では特記すべき遺跡は検出しなかった。１次は法華寺南門推定地（４次）のすぐ南側で地形も一段下り、阿弥陀浄土院へ連なる場所であるが、奈良時代に遡る遺構はなく当時は南へ下る沼状の低湿地であったことが確認された。

Ⅵ　海竜王寺北方の発掘調査（第95－２次）

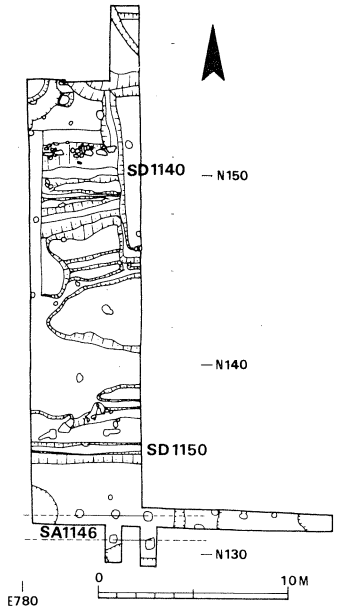
駐車場造成にともなう調査で、調査地は海竜王寺現境内の北に接する水田で、金堂の北々東に位置する。検出した遺構は築地１条と溝２条である。

築地（ＳＡ１１４６）　発掘区南端を東西にはしるものである。撹乱のため２間分しか確認できなかったが、基底幅は６尺、柱間寸法は６尺等間である。

溝（ＳＤ１１５０）　築地ＳＡ１１４６の北2.8ｍの位置を東西にはしる幅約1.6ｍ

の素掘りの溝である。南岸は遺存状況良好であるが、北岸は削平を受けている。溝の堆積土は2層にわかれ、下層を奈良時代、上層を平安時代初期に比定できる。築地ＳＡ１１４６の北雨落溝と考えられる。

溝（ＳＤ１１４０）　溝ＳＤ１１５０の北１５ｍ（心々距離）の位置を東西にはしる幅1.9ｍ、深さ1.2ｍの溝で、大きい自然石を側面に並べて護岸としている。護岸は北壁では良く残っていたが、南岸では発掘区西端に一部残っているにすぎない。底は素掘りのままで化粧はない。瓦類、土器類、貨幣、木簡などが出土し、奈良時代に比定できる。



第８図　第95－２次発掘遺構図

この築地ＳＡ１１４６、東西溝ＳＤ１１５０はともに、現在までに確認されている平城京条坊区割のどれとも明確な関連性を示さないが、築地と東西溝のいずれかが海竜王寺旧寺域北限の一端を示すものであることは確実であろう。ただ、両者のいずれが寺域北限であるかについては決しがたく、今後の調査をまちたい。

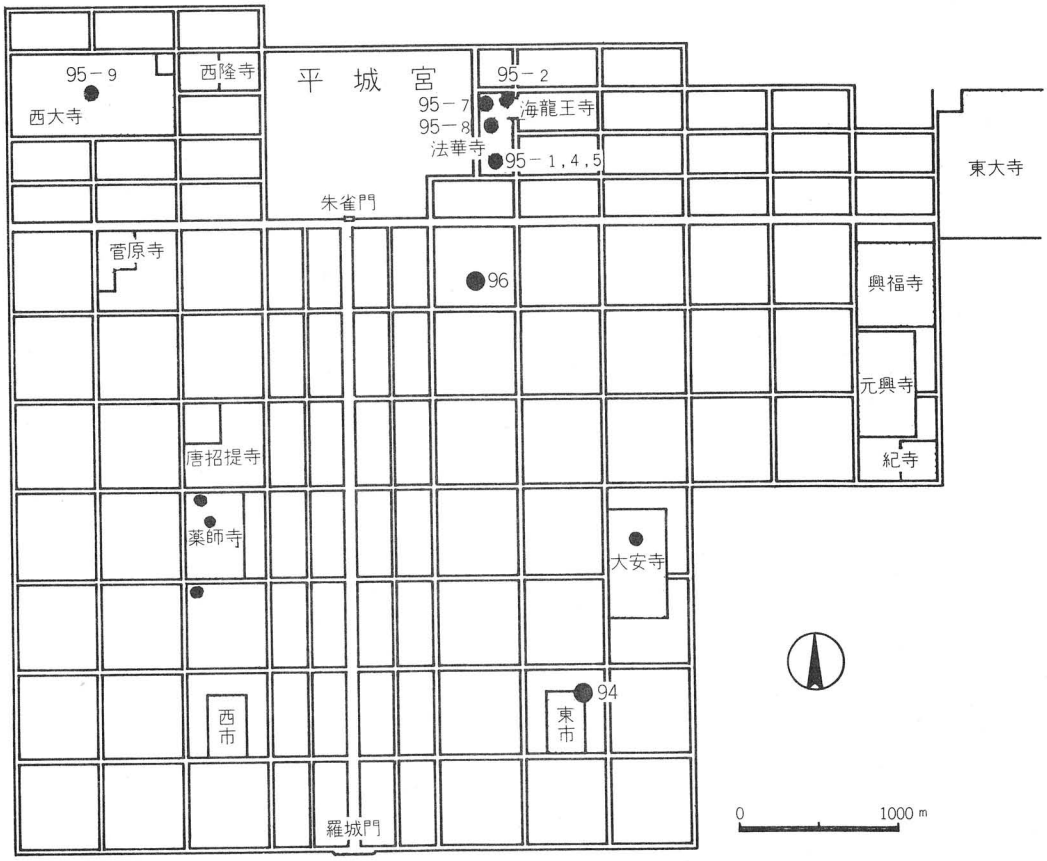
Ⅶ　西大寺の発掘調査（第95－９次）

庫裡増築の現状変更にともない西大寺の依頼によって行なった調査である。

調査地は、現境内北門西脇で伽藍中軸線上にあり、中大門跡推定地である。発掘面積は、３３㎡と小規模であったため、中大門は発見できなかったが、４条の東西溝を検出した。うち平行に走る２条の溝（北幅0.5ｍ、南幅1.2ｍ）は東西方向の道路の側溝である。北側溝の一部は木樋を用い、その先端はコの字形に石組した暗渠となっている。道路幅は溝心々で5.8ｍあり、西大寺創建以前の平城

京条坊の坪を画する幅２丈の小路と考えられる。なお創建後も金堂院と塔院を区画する寺内道路として利用したとみられる。

この道路は、平城宮西面北門に通じる一条南大路と一条北大路の条間路にあたり、従来大路規模（８丈）に推定していた。しかし今回の調査で幅員が２丈であることを確認し、さらに、検出した道路心と推定西面北門心がほぼ一致することから、この条間路は小路であったと考えられる。



第9図　平城京調査位置図